令和３年７月16日

◆　夏のノスタルジー　◆

このメッセージでも触れたけれども、２年ぶり、無観客で実施した文化祭。文化部の活動をゆっくりと味わうことのできたとてもよい機会となった。

そんななか、文芸部の会場に足を運んだ時のこと、多くの作品集が展示机の上に置かれていた。その中の１冊を読ませてもらえるかな、と声をかけると「どうぞ！」との声。会場を出て、校長室へ向かっていると、部長さんが駆けてくる。「できれば、こちらを…」と、別の１冊を持ってきた。「ありがとう。きちんと読ませてもらうよ」。

表紙には“Peridot”の文字と、砂浜に立ち、海原を見ながら両手を広げる少女の姿。視線の先には入道雲。これからの季節にぴったりの構図に、わざわざ取り替えに来てくれたのかなという思いを感じ取ったが、果たしてそうだったのか…定かではない。

今日、梅雨明けの発表があった。いずれもこれからの季節に相応しい「夏」をテーマにした５つの物語。

宮沢賢治の『春と修羅』をモティーフにした作品があるかと思えば、入れ子構造のように技巧を凝らしたもの、また少しホラー気味（内容はとても温かなものでした）な短編など…、いずれも、夏という季節が醸し出すノスタルジーを感じさせ、また琴線に触れるものであった。彼女たちの年代でしか感じることができないであろういろいろなものが表現されている。

一つの作品の「あとがき」にこんな言葉があった。

「気づいたら１月下旬でした。（中略）文化祭が中止になって部誌の締め切りが曖昧になったからと…（後略）」

この厳しい状況下で綴られた作品であることを改めて認識する。それにしても若さとは素晴らしいものだ。瑞々しい感性に満ちあふれた作品集となっている。

読後、表紙にお似合いと思われる写真をつけて感想を返した。彼女たちの笑顔はとても柔らかなものだった。